F.F.FIGHT アルティメット2

成人向コミック

F.F.FIGHT 2

ULTIMATE

アーシェは闘技場に入ってすぐ、その熱気に一歩たじろいだ。
狭い闘技場。
すし詰めになっている観客たちは男ばかり。
下品なヤジが飛び交う空間は、アーシェの知識にはない場所だった。
(こんな場所で戦わされるなんて……でも、これも活動資金のためよ)
解放軍の活動資金が欲しかったアーシェは、秘密の格闘大会の噂を聞きつけた。
勝てば大金を得られるとのことだが、負けの条件がどこかおかしい。
対戦相手2人を倒せばよし。
アーシェは、性的にイかされたら負け。
(馬鹿げてるわ。格闘というより、むしろショーに近い感じね)
どうりで女性しかこの大会に出られないわけだ。
相手は屈強そうな男2人。
しかし、さほどレベルは高くないように見える。
(これなら私1人でもなんとかなりそうね…不安点は、先に飲まされたあれか)
戦いに際して「興奮剤」だと渡された液体。
それを飲むのも規約のうち。
確かに今、身体が火照り始めているのが分かる。
しかし、違和感があった。
(興奮させて理性を飛ばすのが目的かと思ったけど、これは……まさか、媚薬?)
勝敗の判定。アーシェは、イったら負け、なのだ。
媚薬と思って間違いないだろう。
感じやすくさせて、イかせやすくしようと言うのだろうが、甘い考えだ。
(この程度の媚薬で、私がどうにかなるはずないじゃない)

相手が油断してくれているのなら、
この戦いは勝ったも同然。
ナーシェは仁王立ちで相手を見据え、
不敵な笑みをこぼした。
「さぁ、そろそろショーを始めようか……
お姫様が無様にイかされるショーを！」

戦いが始まって数分。
アーシェは余裕を持って相手を制していた。
飛びかかってくる男たちを軽くいなし、
返す手で反撃を加える。
しばらくはいい調子だった。
しかし男たちに余裕があるのが
気に入らない。
（なによこいつら。戦う気がないの？
組み伏せる隙を狙ってるのは
分かるけど……）
更に数分が過ぎ、
観客たちからのブーイングがわく。
知ったことではない。
アーシェは男たちを叩き伏せようと、
強く踏み込んだ。
しかしその足はもつれ、
無様に膝をついてしまう。
（なにこれ？　まるで熱でも出たみたいに、
意識がフワフワして……っく！）

その隙を男たちが見逃すはずがない。
飛びかかってきた男たちを辛うじて制し、
アーシェは数歩退く。
（もしかしてこれ、媚薬の効果？
私、効き目を甘く見てたの？）
気がつけば身体の中、特に下腹部を
中心にひどく熱くなっている。
それどころか愛液が溢れていることさえ
分かった。
興奮で気付かなかったらしい。
「ほら、後ろへの注意がおろそかだぜ！？」
「あぁっ！？
くっ……放せっ、この卑怯者め！」
後ろ手に捕らえられると、
観客が一気に沸き上がる。
なんとかして引きはがそうともがくが、
男の腕力は相当のものだった。
（いけない！　このまま押さえ込まれたら、
こいつらの思うつぼだわ！）
足をバタつかせてみても、
男の力が抜けることはない。
むしろ、暴れれば暴れるほど、
アーシェの媚薬の効き目は
強くなっていくのだった。

「どうれ、マ○コの濡れ具合はどんなもんだ？」
「くううっ！　やめろっ、貴様らごときに、そうやすやすと触らせるものか！」
しかし男はニヤニヤと笑いながら、容赦なくショーツに手を入れてくる。
男の指の不快感と、激しい愛液の量、そして少なからず感じてしまったアーシェ。
苦悶の喘ぎに性的な色つやがあることを、男たちは聞き逃さなかった。
（悔しい！　なんでこんなヤツらに！
媚薬さえ効いていなければ、こんなことには！）
主催者側の計算通りなのだろう。
それを覆してやるつもりだったのに。
こんなにあっさりと術中にはまってしまった自分が情けなかった。
「おやおや、もうグショグショじゃないか。早くブチこまれたがってるみたいだぜ」
下品な男を睨み付ける。
怒りで人が倒せればいいのにと強く思った。
そして気付く。まだ、怒りが勝っている。
簡単に絶頂したりするはずがない。
媚薬ごときに負けて、醜態をさらすわけにはいかないのだ。

しかし、相手は女を犯すためだけに
鍛えられた男たち。
その手際の良さは、アーシェの想像を
はるかに超えていた。
「このっ！　胸当てを……あぁ！
やめろっ、それを剥いだら……っ！」
地面へと押し倒され、
両手両足を上手く押さえつけられる。
そして男は、シャツと胸当てを
一気に剥ぎ取ってしまった。
ようやく乳房があらわになったと、
歓声があがる。
その声は、アーシェにとって
屈辱以外のなにものでもない。
〔あの人以外に見せたことのない、
私の胸を……身体を！　許さない！〕
男の指にでも噛み付いてやろうと、
しきりに首を振る。
しかし男たちは慣れた手つきで
乳房を撫で回し始めた。
「へへ、もう乳首も立ってやがる。張りもあるし、
なかなかいいモノをお持ちだ」
乳房を鷲掴みで揉み、
乳首にも容赦なくつまみかかる。
それはまだ、快感と呼ぶにはほど遠い愛撫。
耐えられるレベルだった。

もちろん簡単な愛撫だけで終わるほど、この戦いは甘くはない。
男はアーシェにのしかかったまま、その屹立した乳首をしゃぶりにかかった。
「んぁあ！　やっ、やめてっ！　なにをするの！？」
その答えは観客の声が答える。
犯せ！　犯せ！　会場が沸きに沸いていた。
それに応えるように、男の愛撫は勢いを増していく。
最初は不快感しかなかったその愛撫も、次第にくすぐったくなっていく。
そして、こそばゆさを我慢しているうちに、いつしか快楽だと思うようになっていく。
（う、嘘よ！　こんなの、ぜんぜん気持ちよくなんてないんだから！）
いつしか、アーシェの口からは官能の喘ぎが漏れだしていた。

「そろそろいい具合にとろけて来たな。
なら、ご開帳と行こうか！」
「ひっ！？　やっ、やめてっ、
見ないでぇっ！！」
ついに下まで脱がされ、すべての女性器が
観客たちの前にあらわになる。
そそり立った乳首と張りのある乳房。
しとどに濡れた股間は匂い立つほど。
観客たちも、そして男たちも、
その性器の艶っぽさに息を呑む。
（なんてこと！？
こんなヤツらに見られるだなんて……
絶対に許せない！）
なんとか男の手を振りほどこうともがくが、
やはり身動きひとつ取れない。
アーシェは絶望にも似た思いをわき上がらせるが、
すぐにそれを振り払う。
「この程度で、この私が屈すると思わないでよ！？」
自分に発破をかけるアーシェ。
しかしそれは、負け惜しみにしか聞こえない。
男たちはにやけ顔のまま、
アーシェの秘部へと顔を寄せる。
「きれいなピンク色だ。
あんまり使い込んでないみたいだな？」
そして男は、濡れそぼったクレヴァスに
指を這わせた。

まずはクレヴァスを押し広げる。
膣口も尿道口も、クリトリスも丸見えにされる。
あまりの恥ずかしさと悔しさに、
アーシェは目眩さえ起こしていた。
しかしこのまま屈するワケにはいかない。
なんとか意識を持ちこたえる。
「クリトリスをしゃぶられるのと、
膣に指を突っ込まれるのと、どっちがいい？」
「ふざけないで！？
そんな狼藉、許すはずが……あぁあ！？」
アーシェの答えなど聞くまでもなく、
男はクリトリスと膣を同時に責め始める。
さすがのアーシェのこれには耐えられず、
高い嬌声を絞り出した。
敏感なクリトリスを乱暴に吸われ、
舐められ、甘噛みされる刺激の強さ。
すでに濡れていて、男の指を難なく受け入れた膣。
中を掻き回され、理性が薄まる。
（なにこれ！？　なにこれ！？
こんなの、いつまで耐えられるの！？）
しかし、絶頂してしまっては負けが決定する。
敗北すれば、自分の身体が
売られてしまうことになるのだ。
（絶対に負けられない！
これ以上の屈辱なんて、私には耐えられない！）

「強情な女だな。
もう、まどろっこしいことは止めだ！」
ヴァギナを愛撫していた男が、
アーシェを四つんばいにさせた。
まずい！　そう思う隙さえ与えず、
アーシェの膣を奥まで貫く。
（そんなっ……お、犯されてる？
私、こんな男のモノを受け入れてる！？）
喘ぎは苦悶。
そこに快楽の色がないことを見て、
男はやけになって腰を振る。
まるで火の棒を差し込まれているかのような
感覚がアーシェを襲った。
快楽と言うよりは野性的な、
そして野蛮なだけの行為。
殴られている感覚に近い。
それでも膣は男のペニスを受け入れていた。
愛液は止めどなく溢れている。
ごりごりと膣壁を擦られ続けているうちに、
次第に意識が薄れていく。
「おら。イくぞ！　中に出してやるからなっ！」
「なっ！？　やめてっ、
そんなこと許されるはずが……
あ、あ、あ、あああ！」
無法者たちの賭け闘技場に、
ルールなどあるはずもない。
アーシェは膣内に、たっぷりと熱い精液が
放たれているのを感じていた。
「こ、こんな……こんな……っく。
でも、私は、屈したり……しないっ！」
そうは言っても、膣内の熱さに性欲に対する
とまどいがあった。

「たいした女だ……ここまでされて、まだ抵抗する気力があるとはな」
射精を終えた男をどかし、もう1人がアーシェを抱え上げた。
乱暴にされ続けていたアーシェは、もはや体力的に抵抗できない状態。
それでもただ抱かれはしないと、男を押しのけようとする。
しかしそれさえも、男にとってはいい刺激になるらしい。
アーシェを包み込むように抱き、乳房と股間を同時に愛撫し始めた。
〈シッ! こ、こいつ……さっきの男よりも、上手い!?
んんっ……!〉
「女っていうのは、もっと優しく感じさせてやらなくちゃいけないぜ」
男は膣内の精液を掻き出すように、ヴァギナを愛撫する。
その指使いに乱暴さはなく、アーシェの感じるところを的確に捉えていた。
〈いけない。こいつに抱かれたままだと……いい、イかされたら、負けちゃうのに!〉
男は余裕の笑みを崩さないまま、アーシェを徐々に高めていった。
膣内も、クリトリスも、そして乳首までをも丁寧に撫で上げてくる。
気がつけば、アーシェの吐息は官能の色に染まりきっていた。

また四つんばいの体勢を取らされ、
ゆっくりと挿入された。
先ほどの男より太く、そして長い。
熱い塊がじんわりとアーシェの中を
攻めてくる。
「あ、あっ！　駄目っ、こ、こんなの、
駄目ぇぇ……っ！」
亀頭が子宮口に届く。
体内を圧迫されているのに、
それは何故か快感だった。
ズンッと押し込まれる度、
背筋に電撃が走る。
快感が形になってあらわれていた。
（いや！　このままじゃイっちゃう……
本当に、イっちゃう！）
男の挿入は、入ってくる度にその角度が
違うのか、膣壁のあちこちを擦り付ける。
グイグイと攻め込まれる感じに被虐的な
喜びさえ見つけ、アーシェは喘ぎ続けた。
（私っ、もう駄目！
イく……イきたくないけど、もう、
耐えられない！）
もう、観客たちの声も聞こえない。
ただ、快楽しかそこにはない。
気を放ってしまえば楽になる。
しかし、解放軍の活動資金が得られない。
いや、そもそも間違いだったのだ。
この戦いは、最初から仕組まれていた。
「んぁぁぁ！　イくっ、イきますっ、
あぁ、も、もう許してぇぇぇぇっっ！！」
遠くから聞こえる歓声に、アーシェは自らの
敗北を知るのだった。

戦いに負け、金も手に入れられず、アーシェは身売りをさせられることになった。
従いたくなどないのだが、拒めばそれ以上の屈辱が待っているだろう。あるいは死か。
従っているふりだけしておいて、逃げ出す機会を待つか。
そんな考えが甘いことに、すぐに気付かされることになる。
「こ、こんな所で脱げと？　誰かに見られたらどうするのです！」
「そのスリルがいいんじゃないか。逃げようとしても無駄だぜ？　見張りもいるからな」
裸に剥かれ、更に見張りまでいるとあっては、逃げ出しようがない。
あとはただ、この姿を道行く人々に見られないよう、息を潜めるだけ。
（こんな辱めを受けるくらいなら、いっそ自害……いえ、駄目よ。解放軍のためにも）
アーシェにはまだやらなければならないことがある。
こんなところで惨めにのたれ死ぬわけにはいかない。たとえこの身を売ってでも。
観念したらしいアーシェを見て、男はいやらしい笑いを浮かべる。
「さぁ、いい声で鳴いてくれよ？　俺は人に見られる方が興奮するんだ！」
言いながら愛撫を始める。男は初手から股間に手を伸ばし、ヴァギナを揉んだ。
まだ濡れていない股間を揉む手。その不快感に、アーシェは身じろぐ。
しかし男をはね飛ばすわけにもいかず、ただ耐えるのみ。
「どうした？　もっと抵抗してもいいんだぞ？　その方が燃えるしな！」
わざと声を荒げる男を、アーシェはきつく睨み付けた。
しかしその程度の反撃ではどうにもならない。むしろ相手を楽しませるだけ。
アーシェは息を殺し、感情を殺すことで対応することしかできなかった。

乱暴ではあっても、陰部を触られていれば
自然と愛液が溢れてくる。
悔しいことだがそれが女性の肉体だった。
どれほど歯噛みしても変えられない事実。
しかし男は、うっすらと濡れ始めた股間から手を放し、
乳房にその興味を移す。
「小さすぎず、大きすぎず。理想的な美乳だな……
張りがあって、乳首もきれいだ」
まるで虫が這うかのような指使いで
乳房をそっと触りまくる男。
怖気が走り、声をあげてしまいそうになるアーシェ。
（駄目！　ここで叫んだら、こいつの思うつぼだわ！）
自分で口を押さえなければ、
自然と声が漏れてしまうかもしれない。
アーシェは歯ぎしりさえするほどに口を閉じ、
なんとしても声を出すまいとする。
「我慢しているところがまた可愛いですね……
なら、これはどうですか？」
「っ！！　ンッ、や、やめっ……っ！」
さわさわと這うようにしていた指が、
乳首をつまんで強く引っ張り上げる。
急激な刺激の変化に、閉じていた口も思わず開いてしまう。
もちろん慌てて閉じ直し、周囲を伺う。
どうやら、まだ見つかってはいないらしい。
（悔しい……こんなことをさせられるなんて！
こんなことを我慢させられるなんて！）
敵の術中にはまり、まんまと負けた自分が悪いのだが、
納得がいかなかった。
気高き王女である自分が、なぜこんなスラムの道ばたで
素裸にされているのか。
あまつさえ気色悪い男に身体を好きに
もてあそばれているなど、考えたくもない。
アーシェの身体は、強い肉欲を覚え始めていた。

ひとしきり乳房を堪能した男は、
また股間へと目を向けた。
乳房への愛撫のせいか、
そこはもうずいぶんと濡れていた。
（ち、違う……私は、こんな姿を
見られたいだなんて思ってないわ！）
そんな思いに気付いたのか、
男はにやけた顔をアーシェに向ける。
そして愛液を指ですくい、
わざわざアーシェに見せつけた。
「こんなに濡らして……王女様も、
人に見られてするのがお好きなんですか？」
そんなはずがない！　カッとするが、
しかし騒ぐわけにはいかないと口を閉じる。
男はそんなアーシェを気にもせず、
ラビアを開き、クリトリスの包皮をめくる。
充血し始めた女性器が、
女の匂いを醸し出していく。
男は少しずつ息を荒げながら、
一心不乱にアーシェのヴァギナを弄り回した。
（くっ、クリトリスはまずいっ……感じすぎる！
ゆっ、指突っ込まないでっ！）
心の中であげる叫び声が、
相手に聞こえるはずもない。
男はリズミカルに、ツンと突き出した
クリトリスをくすぐり続ける。
同時に膣へと指を埋め、ぐっちゃぐっちゃと
音を立てるように掻き回した。
（こ、こんなのっ、駄目っ、おかしくなる！
感じ過ぎちゃうっ、あぁあぁ！）
ただ歯を食いしばり、目を閉じて、
襲い来る快感を否定する。
しかし、そんな状態が長く続けられる
はずもなかった。

もう十分すぎるほどの愛撫を繰り返し、内ももには愛液が垂れ流れていた。
アーシェの息は荒く、ただ言葉を発していないというだけの状態。
もしかすると、もうバレているのかもしれない。
見られているのかもしれない。
そんな恐怖に目を開けたその瞬間、男の剛直がアーシェの膣を貫いた。
「あ、ぁあ……〜〜〜〜っっ！！」
一気に根本まで突き刺さる。
先端が、アーシェの膣の奥壁に触れた。
（入っちゃった……こんなに奥まで、一気に入って来ちゃった……ぁあああ！）
激しい官能が脳天を貫いた。
もう、立っていられないほどの快感。
ガクガクと震える膝。
男はそんなアーシェを支え、ペニスを突き立てる。
まず手始めにと、何度も何度も出し入れする。
水音が激しく響き渡る。
股間を打ち付ける音も響き、まるで連続でビンタをされているような音が聞こえた。
（駄目！　こんな音させてたら、バレちゃう！　見られちゃうじゃないの！）
うろたえるアーシェを、男は満足げに眺めていた。
恍惚の笑みだった。
「さぁ、それじゃあ、みんなに見られながらフィニッシュと行きますか！」
ことさらに見られていることを強調する男。
よほどの露出狂なのだろう。
アーシェもすでに、男の背徳感に共感していた。
見られることで感じていた。
「あぁ！　もう駄目っ、イく……私もイくぅうっ！」
ガクッと膝の力が抜けた。
同時に、男も大きなうめき声をあげる。
膣内に熱いモノが流れ込み、アーシェは激しすぎる
絶頂感に意識を飛ばした。
気絶してしまえばもう、誰に見られてもかまわないだろうと思いながら……

……いったい、もう何日になるのだろう。
戦いに敗れ、囚われの身となってから、
最低でも三日三晩は経っているだろうか。
その間、拘束されたアーシェの元を
訪れるのは、数人の男たち。
代わる代わる現れては、アーシェの肉体の
隅々までを嬲っていく。
水と食料は最低限。
あとは、果てしない快楽だけが
与えられ続けていた。
「お、お願い……もう許して、解放して……」
何度したかも分からない懇願。
しかし男たちは、今日も嬲り続ける。
感覚が麻痺してもおかしくないはずなのに、
触られるとすぐに感じてしまう。
水や食料に媚薬が含まれているのだろう。
息を吹きかけられるだけでも感じた。
乳首をつねられれば、誰にはばかることのない
嬌声があがる。

男がペニスを突き出してくれれば、
無条件に口に含むしかない。
空腹からか、それとも性的興奮からか、
ペニスの塩気さえ美味に思える。
熱く張り詰めた亀頭を口に含むと、
男の淫気が沸き立ってくる。
ここでゆっくりとしていると、
無理矢理ねじ込まれてしまう。
アーシェは口をすぼめ、
バキュームのようにペニスをすすった。
（すごい……口の中で、ビクビク蠢いてる。
喉の奥まで届いちゃいそう……）
根本まで呑み込み、口内で舌を転がす。
亀頭を、カリを、竿までも丹念にねぶり、
またすする。
口を膣に見立て、頭を前後させることも忘れない。
男は満足げな呻きをあげ、更に腰を突き出した。

射精が近くなってくると、男の行為に
荒々しさが乗ってくる。
頭を無理に押さえ込まれ、
喉までペニスを押し込まれた。
同時に胸も揉み始める。
イラマチオの苦しさにも、
もうこの数日で慣れてしまった。
無理に抵抗しようとすると余計に苦しい。
であれば、男の好きにさせればいい。
（私の口も喉も、本物のマ○コみたいに
扱ってるのね）
男の呻きが徐々に昂ぶり始めている。
もうすぐ喉の奥に熱い粘液が噴きかかるだろう。
（精液も、飲み慣れれば美味しいものだわ……
こいつらのは、特に濃いし）
獣のような叫び声と共に、喉にそして口内に
ザーメンが満たされていく。
もちろん飲み干さなければならない。
一滴でもこぼせば、男たちは怒りを見せる。
「じゅるっ、ん……んっぷ、
ごくんごくん……んんっ」
そんなアーシェを満足げに眺めながら、
男は射精の快感に浸っていた。
まだ口内で脈動するペニス。
アーシェは尿道に残った精液を
舐めるようにすすった。

ちゃんと飲んだご褒美だ。
男はアーシェを組み敷き、膣を蹂躙した。
始終濡れっぱなしのヴァギナは
男のモノを難なく受け入れる。
挿入の快感にアーシェは高い嬌声をあげたが、
男は何故かそれ以上動いてこない。
「……え？　な、なに？」
膣の中に、ぴったりとペニスが埋め込まれていた。
根本まで突き刺さったそれは、
小さな脈動で膣壁をくすぐるだけ。
「う、動かないの？」
そういうアーシェに、男はいやらしい笑みを見せつける。
「お願い。つ、突いて……もっと突っ込んで！
入れてるだけじゃなくて、もっと！」
アーシェの叫びに気を良くした男は、
ゆっくりと出し入れを始める。
しかしそれは、むしろ焦らされているだけ。
この程度ではもう、感じはしない。
「もっと、もっと激しく突っ込んで！
グチャグチャにしてください、お願いします！」
それでも男は、膣の感触を確かめるかのように
ゆっくりとストロークを続ける。
快感というより、痒いところに
あと少しで届くのに、という焦燥感
アーシェは願うだけでは飽き足らなくなって、
自ら腰を振り始める。
しかし体勢が悪いのか、まったく激しさは乗ってこない。
男はまた満足げな笑みを浮かべて、
ついにアーシェの拘束を解いた。
「欲しければ、ちゃんと自分で動くことだな！」

寝そべった男の上に、
アーシェが馬乗りに乗る。
騎乗位の体勢になってようやく、
アーシェは好きなだけ動けるようになった。
「ああ、これ！
これよっ、これが欲しかったのっ！」
小刻みに腰を上下させ、男のモノを咥え込む。
長いおかげで抜けてしまうことはない。
自らリズムを取り、ペニスに膣内を行き来させる。
時に強く、時に弱く。
腰を浮かせて、浅い位置をこする。
カリが膣口に引っかかる感覚がたまらない。
ドシンと腰を落とせば、子宮口にまで
ペニスが届いた。背筋まで犯す痺れがいい。
そして腰を落としたまま、
股間を前後左右に振り続ける。
密着した股間。クリトリスが
男の根本でこすれるのがいい。
膣内で好きに暴れさせられるこの体勢は、
アーシェの好きなスタイルになっていた。
「あぁ、すごい！　これ来る！
来ちゃうの！　あぁあっ！」
男も、ただ黙って好きにさせているだけではない。
たゆんたゆんと揺れる乳房に手を伸ばし、
思いきり掴みかかっていた。
鷲掴みの乳房を引っ張られる感じがまた、
アーシェの被虐心をくすぐっている。
そしてついに、男も腰をはね上げ始めた。

「あぁあああ！！　すごいっ、突き刺さるっ、ズンズン来るぅぅ！！」
アーシェの腰の動きに合わせ、男が腰を突き上げる。
始めは合わなかったリズムも、アーシェの側からしっかりと運動を取る。
男が腰を下ろした時にアーシェは上げ、突き上げた時に下ろす。
パチン！　と股間がぶつかる音に、アーシェは凄まじい衝撃を受けていた。
「はっ、激しいっ、すごい！　この、突き刺さる感じっ、たまらないのっ！」
激しすぎる出し入れに、男も苦悶の表情を見せる。
この快感をまだ味わっていたいのだが、アーシェの性技はあまりにもすごすぎた。
「来てっ、中にっ……おま○この中に出してっ、精液いっぱい、出してぇえ！！」
膣とペニスの摩擦熱で、アーシェも男もどうにかなってしまいそうだった。
いっの間にかアーシェはもう、男に突き上げられるだけの状態になっている。
すでに足腰に力が入っていないのだ。
もしかしたら、もう絶頂しているのか。
でも、もう駄目っ、私、いっ、イくっ！
こんなの、すごすぎてイくぅぅぅ！！」
その声に合わせ、男も一際高く腰をはね上げた。
同時に膣最奥で噴射する。
その快楽に目をトロンとさせるアーシェを見て、男は満足げに頷いた。

ティファは再び、苦い思い出のある
闘技場に立っていた。
聞き覚えのあるヤジ、欲望に満ちた熱気が
ティファを駆り立てる。
以前、この闘技場に囚われた子供たちを
救うために戦いに挑んだ。
しかしその時は、苦い敗北を
喫してしまったのだ。
子供たちはまだ囚われたまま。
救出するためには戦わなければならない。
(再戦の機会を与えられただけ
マシだと思うしかないわね)
条件は以前と同じ。
相手を倒すか、自分がイかされるか。
媚薬を飲まされた身体は早くもほてっている。
シャツの下でそそり立ち始めている
乳首の感覚が分かる。
(でも、子供たちのためにも、
負けるわけにはいかないのよ!)
今度こそはという思いが、
ティファを冷静にする。
「さて、そろそろ開演の時間だぜ?
やられる準備はいいか?」
審判すらも劣情をあらわに
舌なめずりをしている。
そんな下手な挑発には乗らない。
ティファは拳に力を込めた。
「いいわよ……どこからでもかかってきなさい!」

冷静に男たちの出方を待つティファに、
観客からのヤジが飛ぶ。
そのヤジに急かされたワケではないのだが、
つい気がはやってしまった。
「ほうら、捕まえたぞ！」
目の前の男に気を取られすぎて、
背後から来た相手を軽んじてしまった。
捕まって、あっという間にシャツをまくられる。
「あぁ！　だ、駄目っ、放してっ……このっ！」
言われて放すはずもなく、
男たちはティファの巨乳にむしゃぶりついた。
背後からは掴むように揉みしだき、
前からは乳首に舌を這わす。
媚薬の効果ですでにそそり立っていた乳首は
噛みやすいのだろう。
男は一心不乱に、きゅんと突き立つ
乳首にしゃぶりつく。
（なんで？　こんな簡単に
やられるはずなんてないのに！）
自分の力を過信したわけではない。
冷静だったはずなのに。

「おお、こっちももうグショグショだな。
そんなにヤられたかったのか？」
ショーツに指を突っ込まれてはじめて、
ティファは自分の状況を知った。
（そうか、媚薬が前回のものよりも
強くなってたんだ！）
いくら冷静になっていたとはいえ、
身体が動いてくれなければ話にならない。
股間を弄られてようやく、
身体が快感を欲しているのだと気付いてももう遅い。
男たちはすべてを知った上で、
ティファをもてあそんでいたのだ。
（なんてこと？　これじゃあ、
またヤられるためだけに来たみたいじゃない！）
男の指は乱暴に、しかし的確にティファの
ヴァギナを弄り回していた。
クリトリスをこね、ラビアをつまみ、
そのクレヴァスの奥へと指を埋める。
すでに愛液まみれのソコは男の指を
難なく受け入れていた。
（駄目っ。こんな程度で感じたりしたら、
この先どうなっちゃうか分からない！）
ティファは怒りに心を燃やし、
男たちから離れようと試みた。

しかし、それは無駄な抵抗だった。
媚薬によって力を奪われている身体では、
思い通りに動けるはずもない。
すぐさま押さえつけられ、
胸も股間もあらわにされる。
「こっ、この！　放してっ、こんなの卑怯よ！？」
「アンタが弱いのが悪いんだよ。
おとなしくイかされちまうんだな！」
高らかに勝利を宣言する声。
観客たちのボルテージも上がる。
もちろんティファとて、
このままやられるつもりはない。
この程度の押さえ込みなら、
今までだって何度も跳ね返してきた。
（媚薬の効果くらい、気力で消してみせるわよ！）
さらけ出された乳房くらい、
もう大した恥ではない。
負ければ、もっと恥ずかしい目に
遭わされるのだ。
ティファはなんとかして抜け出そうと、
男の上でもがき続けた。

しかし、もがいてもがいても、
男の膝の上から脱することはできなかった。
むしろそれが男にとっては
いい刺激になったらしい。
興奮で息があがりはじめ、
まるで凶器のようなペニスがそそり立つ。
「まずはこのデカパイを、
たっぷりと堪能させてもらおうか」
余裕ある男たちは、あまりにもふくよかな
その乳房へと引き寄せられる。
両の乳首をつまみ、まずはクニクニと揉みほぐす。
「あぁっ！　いやっ、触らないで……」
んんっ、乳首は、駄目ぇっ！」
ついあられもない言葉が出てしまう。
歯を食いしばっても喘ぎは漏れた。
乳首をつままれたまま、手前に引っ張られる。
次いで横へ、そして円を描くように。
鮮烈な、痛みにも似た快感がティファの
心に電流を流す。
ビリビリと痺れるような快感に、
どれだけあらがっても喘ぎが漏れてしまう。
男たちは、そんなティファを見て
勝利を確信していた。

「まどろっこしいことは止めだ！
このままチ○ポでイかせてやるっ！」
十分すぎるほどに潤っていたヴァギナは、
いきなりの挿入をも受け入れる。
ティファの悲鳴が闘技場全体に響き渡ると、
観客たちも総立ちとなった。
〈いやよ！
このままイかされたりなんかしない、
絶対にっ！〉
突き上げられてくるペニスの快感に、
ティファは意識を飛ばしそうになった。
しかし、負けはしないという意識の強さが、
ティファの理性を残している。
快感というよりは衝撃に近い挿入感に
なんとか耐え、抵抗の機会をうかがう。
〈突き上げられて、挿入が浅くなった
時しかない！〉
はね上げられるような出し入れは、
結合感が甘い。
付け入る隙はそこしかなかった。
「くぅっ！　あ、あたしはまだ、
負けたりしない……っ！」
男の手を振りほどき、
身体を横へと転がして結合を解く。
しかし次の瞬間、立ち上がって反撃するはずの
身体は、やはり自由にならなかった。

「なんだ、脅かしやがって……
もう、ろくに立てもしないじゃないか」
「やっぱり、本気でチ○ポが欲しくなるまで、
いたぶってやるしかないだろう」
逃げ出したのはほんの束の間。
ティファはすぐにまた捕まってしまう。
そして先ほどまで突き込まれていた
ヴァギナを、指でいたぶられ始めていた。
(あぁ、駄目。これじゃ、
なんにも変わってない……
ううん、むしろこれじゃあ)
挿入でほぐされた膣に、指が埋められる。
熱く潤ったそこは、まるで蜜壺のよう。
男は欲情に息を荒げ、膣をほじくり回していた。
ヌッチョヌッチョと音をたて、
膣壁を擦り、Gスポットを探る。
もちろん、クリトリスへの攻めを
忘れることはなかった。
性器の外も中も、好き放題に弄られまくる。
今はただ、その快感に耐えるのみ。
(どうしよう。こんなの、気持ちよすぎる……
こんなの、耐えられなくなるっ!)
耐えても耐えても、責め苦は終わらない。
喘ぎ声が溢れ出し、止めることができない。
そしてついに、膣内を激しく刺激する
スポットを探り当てられた。
瞬間、ティファは自分がどれほどの嬌声を
あげたか理解できなかった。
しかし、それは絶頂の叫びではない。
男たちの攻めはとどまるところを知らなかった。

媚薬の効果がティファを高めているのか、
ティファが自ら快感に猛っているのか。
おそらくはその相乗効果だろう。
すでにティファの理性は極限まで薄まっていた。
（なにこれ……もう、気持ちよすぎて、
なにも考えられない……）
抵抗しなければならない。
この戦いに勝たなければならない。
それはまだ覚えている。
しかし、すでに身体だけではなく
心までも不自由な状態。
乳房を揉みしだかれては喘ぎ、
クリトリスをつままれては叫ぶ。
感じてはいけない。堕ちてはいけない。
でも、感じたい。イってしまいたい。
焦らされるような快感の渦に、
もはやティファは抵抗力をなくしている。
（イったら、また負けちゃう。
また、こんなヤツらに、好き勝手にされて……）
まだ悔しさは感じられた。
ただ、それよりも快楽への欲求が強いだけ。
「どうだ？　そろそろ入れて欲しいだろう？」
耳元でささやく男の声に、
ティファは否と応えたはずだった。
もはや自分の言葉さえ理解できない。
ティファは、男の言葉に頷いていた。

無理矢理だった先ほどと違って、
この挿入には強い官能を覚えてしまった。
あられもない声があがり、
男も、そして観客も沸き上がる。
〈本当なら、こんなこと許されない。
認めていいはずがないのに!〉
それでも、突き込まれた瞬から全身へと
伝わる快感に、ティファはあらがえなかった。
突き込まれる度に脳天を突き刺すような
刺激が走り、自然と嬌声があがる。
あまりの快感に我を失い、
淫らなことまで口走ってしまう。
〈駄目なのに。こんなこと、いけないのに…
わたし、もう耐えられない!〉
快感を抑え込むのは難しい。
そして、絶頂感をこらえることは辛い。
男のストロークは、ティファを
絶頂させるためだけに鍛えられたもののよう。
すでに逃げる気さえなくしたティファは、
もはや最後の絶叫を聞かせるのみ。
「あぁ、いや、いやっ! イきたくないっ、
イかされたくないのっ!」
男の腰が動きを強めた。
観客の声が割れんばかりの大音声となった。
眼を切ったように快感が溢れ出し、
ティファの理性をすべて流し去っていく。
「こんなのっ、あぁ、こんなのっ、
もう駄目っ……い、イくぅぅぅぅぅぅぅ!」
こうしてティファは、負けると
分かっていたかのような試合を終えた。

絶頂から少しして、ティファは自分がまた負けたことを知る。
敗北すれば、また別の男たちの慰み者になる。その条件は以前と同じ。
「くっくっく、見れば見るほどソソる身体してやがる」
下卑た笑いを浮かべながらティファの前に立ったのは、少しばかり肉付きのいい男。
「さて、俺との第2ラウンドだ。たっぷりと楽しませてやるぜ」
睨み付けてもビクともしない。
ティファは相手を探りながら、自分の体調を確認する。
媚薬の効果は少し薄れているようで、手足はある程度動かせる。
対した相手でもなさそうだし、これならただやられっぱなしになることはないだろう。
そう思って、立ち上がるティファ。
しかし、まだ全身を思うようには動かせなかった。
「くっ……こ、これは！？」
ぐらついたティファを、欲情に駆られた男が見逃すはずもない。
すぐさま後ろから捕らえられ、押さえ込まれてしまった。
(まだ媚薬の効き目が残ってたの？　こんなに簡単に押さえ込まれるなんて！)
嘲るように笑う男に、ティファは怒りを募らせる。
しかし捕らえられているのは事実。普段なら手こずるはずもない相手であってもだ。
もがいてももがいても、不自由な身体では逃れられない。
乳房を掴まれ、シャツの上から揉み込まれる。たっぷりのサイズに、男は悶えた。
ブラをしていないせいで、シャツの上からでも乳首がつまめてしまうのがつらい。
「こ、こんなことで、押さえ込めただなんて思わないでよ！？」
「いいぞいいぞ。もっと抵抗してみろ。そういうのを組み敷くのが、最高なんだよ」
サディスティックな笑いがティファの心を掻きむしる。
こいつは自分の力に酔うタイプだ。弱者を虐げるしか能がない奴だ。
わずかばかり浮かぶ恐怖心をなんとか退け、必死の抵抗を続けるティファ。
しかし男の手は、胸から腹へ、そして股間へと伸びていく。
太ももを、内ももを撫で回す指の感触が怖気を走らせた。
まだ快感よりも、気色悪さが先に立つ。こんな男に屈したりはしない。
(さっきは負けたけど、ここからは絶対に逃げ延びてやるわ！)
抵抗してはいけないと言われたわけではない。
必ず、子供たちを助け出さなければならないのだから。

「どれ、アソコの具合はどうだ？　おお、いい感じに濡れてるじゃないか」
男の指が、ヴァギナに到達した。
言う通りに濡れてはいるが、まだ耐えられる。
男の指戯は乱暴で、女を感じさせるようなものではなかった。
まるで初めて女性器に触れるかのような指使いは、官能よりも苛立ちを誘う。
（くっ……そ、それでも、媚薬がまだ効いてるから……感じてしまう！）
指先がクリトリスに触れれば、いやでも刺激を感じてしまう。
陰唇をつままれ、引っ張られれば、膣口がぱっかりと入り口を開く。
「もう十分濡れてるみたいだな？　指が欲しいか？　それともチ○ポがいいか？」
どちらもごめんだ。ティファは答えを返さず、身体をくねらせる。
男の身体を押しのけ、時に肘で叩き、足をばたつかせる。
そんなティファを押さえ込むのが楽しいのか、男は更に興奮していく。
荒い鼻息が首筋にかかり、激しい嫌悪感をもよおさせる。
下品にわめく声が苛立ちを駆り立て、ティファの怒りを昂ぶらせていく。
「ほらほら。指で犯しまくるぞ？　グチャグチャに掻き回してやる！」
（その程度で感じたりするもんですか……それよりも、チャンスだわ！）
股間をまさぐるのに精一杯になっている男の横っ面に一撃を食らわせてやろう。
先ほどから探り探り入れていた肘を、大きく振りかぶって打ち込む。
（これでどう！？　首筋にしっかり打ち込んだはず！？）
一瞬で、男の指の動きが止まった。気絶したのだろう。
ティファはホッとして、男の身体をはね除けようとするが、力は込められたまま。
「危ない危ない。あともう少し力が入ってたら、ちょっと痛かったかもな」
（なっっ！？　まったく効いてないなんて！）
腰もダメもまともに入っていない一撃が効くはずもない。
男はまるで、じゃれついてきた子犬をあしらうかのごとくティファの腕を取った。
「これじゃ物足りないだろう？　もっともっと感じさせてやるぜ！」

ハッ…
ハッ…

言うが早いか、男はティファを仰向けに転がして、馬乗りに乗ってきた。
今の力の入らない身体で、男の巨体をはね除けることはほぼ不可能に近い。
ティファは乗られた苦しさと、激しい敗北感に苦悶の声をあげる。
「いい声だ。もっともっと喘がせてやるぜ」
片手で乳房を、片手で膣をまさぐる。2箇所を同時に責められ、嬌声をあげた。
激しく揉み込まれ、押し潰される乳房。しかしその弾力はすごく、男の手を押し返す。
乳首をつままれて引っ張り上げられると、強い痺れが背筋を駆けめぐった。
(だ、駄目！　こんなことで、感じたりなんかしたら……っ！)
なんとか声を抑える。喘いでしまえば、相手の思うつぼだろう。
それが分かっているのか、男はニヤニヤとしたまま膣へと指を埋めてくる。
太い指をペニスに見立て、何度も何度も出し入れする。
ちゅぷちゅぷと響く水音が、大量の愛液の存在を知らしめる。
(違う！　こんなの、気持ちよくなんてない。感じたりなんか、しない……っ！)
指を根本まで入れられ、膣内を掻き回された。
ペニスとはまた違った動きで暴れ回る指は、容易に理性を奪っていく。
自分自身気付かないうちに喘ぎが漏れ、それに気付いてまた口をふさぐ。
しかし強い快感が自然と口を開かせ、喘ぎと嬌声をあふれさせる。
「ここか？　ここが気持ちいいのか？　イきたいなら、そのまま好きなだけイけよ！」
(イヤ！　イったりなんかしない……感じてもいないんだから……っ！)
感じていない。自分にそう言い聞かせなければ、すぐにでも達してしまいかねない。
指の挿入はそれほどの快感があった。感じるところを、的確にくすぐってくるのだ。
指を突っ込まれ、感じすぎる膣壁を容赦なく擦られながら、乳房も犯される。
鷲掴みにしてこね回し、引っ張り上げるような乱暴な愛撫。
しかし、膣を犯されながらだと、その乱暴さがまた快楽を産んだ。
痛みはない。むしろ刺激が快感に変換され、ティファの性感を昂ぶらせていく。
(悔しいっ、こんなにいいようにされて、犯されて、感じてるなんてっ！)
気を抜けば、すぐに絶頂感が高まっていく。
感じてしまうのは仕方ないとしても、どうにかして絶頂だけは避けたかった。
「なんだ。けっこう耐えるじゃないか……それなら、少し遊ばせてもらおうか？」
男の指が、膣から抜き去られた。

男はのしかかったまま、その暴力的にそそり立ったペニスを見せつける。
ひっと息を呑むティファに、男は満足げな笑みを浮かべた。
「こんなバイオツだ。楽しまない手はないからな」
素早く取り出したローションを、ティファの巨乳にまんべんなく振りかける。
そして男は、そのいきり立ったペニスを乳房に挟んで腰を振り始めた。
「なっ！？　や、やめてっ、なにするの！？」
バイズリだよ。男はにやけた顔を近づけながら言った。
乳房の間にあるペニスは熱く、そして予想以上に大きかった。
男はゆっくりと腰を振り、まずは乳房の柔らかさを堪能する。
ぐいぐいと押さえ込むことでペニスにかかる圧力を変えることができるらしい。
指で乳首を挟みながら乳房を揉み込む男は、恍惚の表情を浮かべていた。
（こんなの許せない！　絶対に逃げ出して、一撃食らわせたやらないと！）
しかし男は体重を乗せたまま。今のティファでは身動きすらできない。
ただ乳房が犯されるのを、目の前で見せつけられるだけ。
「さぁ、どうして欲しい？　顔にかけてやろうか、それとも、飲ませてやろうか？」
男の腰の動きが早まった。
まさか、このまま射精するつもりなのだろうか。
（そ、そんな……こんな男の、あ、アレをかけられるだなんて……いやっ！）
胸の谷間からペニスの先端がのぞく。
赤黒いそれは、まさに凶器そのもの。
押さえ込んだ乳房を膣に見立てた挿入は、徐々に速度と押さえ込みを増していく。
男の声も、次第に獣じみてきているのが分かった。
（あぁ、そんな……かけられちゃう。男の人の汁が、顔に……あぁ！）
しかし発射直前、男は腰の動きを止めて、ペニスを引き抜いた。

あぁぁぁぁぁっ！
ビクッ

「なにを、そんな物欲しそうな顔してるんだ？　あぁ？」
「ち、違う……わたしは、物欲しそうな顔なんてしてない……あぁっ！？」
うろたえるティファを、男は激しい体位で組み伏せ直す。
脚をM字に開き、股間が広げられたそのポーズは、下品極まりないものだった。
「なにをするの！？　こんな格好、いやっ……放してぇ！」
なんとか脚を閉じようとするも、しっかりとキメられてしまっていて動けない。
どうすればいい。焦りがティファの余裕を奪い、男に笑みをわかせる。
「まずはお前をたっぷりとイかせてやろうと思ってな！」
膣への容赦ない指挿入。愛液に濡れそぼった淫穴は難なく受け入れた。
まずはこれまでと同じように、1本2本と荒々しく突き込んでくる。
グッチョグッチョと響き渡る水音がいやらしく、背筋に痺れをもたらした。
（だ、大丈夫。こんなやられ方なら、イったりなんかしないっ）
男の指の動きをしっかりと感じながら、ティファはつとめて冷静な振りをする。
しかし、指が膣内でカギを作るように曲がると、その冷静さは消し飛んだ。
（なにこれ！？　ゆ、指が……触っちゃいけないところに……あぁあっ！？）
「一番感じるところは、ここ、かな？」
「ひっっ！？　いやっ、くるっ、なにコレッッ！！　あぁあああ！！」
絶頂とはまた少し違う、快楽の爆発があった。
男の指は的確にGスポットを探り当て、執拗にそこばかりをまさぐり始める。
あまりに激しい衝撃に腰がガクガクと震え出し、もう脚を閉じることさえ忘れる。
頭の中で電気が走り、目の前が真っ白になった瞬間、大きく腰をはね上げた。
プシャアアアアア！
同時に膣から噴き出たものは、愛液の潮。まるで尿にも見えるような潮吹き。
「おお～～！　すげぇ飛んだ。さすがティファちゃんは、潮吹きもすごいねぇ」
「あぁ、な、なにこれ……こんな、こんなの……あぁ、身体が、もう……」
絶頂とは違うが、やはり酷似はしていた。もしかすると、男の射精感に近いのか。
ティファは体中から力が抜けていくのを覚えたが、男はまだ容赦なく膣を犯す。
「もっ、もう駄目！　やめてっ、こんなのおかしくなっちゃうっ、あぁ、いやぁ！！」
嬌声と共に、もう一度潮を吹いた。先ほどよりは少量だが、それでもすごい。
男は満足げに噴き出た潮を眺め、舌なめずりをする。
「さぁ……次はどうして欲しい？」
言いながらも男は、ティファを組み敷いて寝技の体勢に持ち込んだ。

男の剛直がティファの股間をまさぐる。性器同士が擦れ合い、官能をわかせた。
しかしそれを受け入れるわけにはいかない。ティファは挿入されまいと抵抗する。
男はそれさえも楽しんでいるようで、更に強く抱きついてくる。
そしてついに、熱く熟れきった膣が男のペニスを迎え入れてしまった。
「おお、こりゃすごい！　よく締まるし、ヒダヒダも最高だっ……ああっ！」
絡み合っているうちに挿入されてしまう。その衝撃にティファは腰を震わせた。
男は最初からエンジン全開で腰を振る。股間がぶつかり、パチンパチンと音が響く。
それだけではなく、粘液が弾ける音も、ティファの嬌声も和音を作った。
（駄目っ、声をあげたら駄目なのにっ……感じたりしたら、駄目なのにっ！）
男をはね除けようとするのだが、当然そんな力はもう出ない。
むしろ男の野生に火を付けてしまい、更に深くまで押し込まれる始末。
「こ、こんな、ことで、わたしは、負けたりなんか……ああ、し、しないんだからっ！」
負け惜しみはもはや、男にとって最上の音楽に等しい。
息を荒げ、強く深く腰を打ち付ける。ペニスの先端が、ティファの最奥まで届く。
「こ、ここに射精してやるよ。一発で妊娠できると思うぜ？」
「ひいっ！？　やっ、やめてっ、中には出さないで……あぁ、そ、そこではっ！」
子宮口前で射精しようが、膣口近くで射精しようが、命中率はさして変わるまい。
それでも、身体の奥の奥で射精されてしまうという恐怖に、ティファは身をすくめる。
男はそんなサディスティックな興奮に、我を忘れて腰を振っていた。
「さぁ、1回出すぞ。そのまま、抜かずに犯しまくってやるからな！」
「やめてっ！　お、お願い、中出しだけはっ、あ、あ、あぁ……ンぁあああああっ！」
股間を叩き付け、ペニスを一番奥まで突き込んだ状態で、男は射精した。
（あぁ、そんな！　出てるっ、精液が、わたしの中で、一番奥で出てるうっ！！）
指とは違う暴れ方だった。射精の衝撃は、膣内だけではなく全身を痺れさせる。
ドクンドクンと数度の脈動。そして深い満足を得た男の吐息。
ティファは一瞬、愛しい男の顔を思い浮かべたが、それはすぐに絶望へと変わった。
「次は一緒にイこうぜ……マ○コの中の、ザーメンを掻き回されながら、絶頂しろよ！」
男が腰を振り上げた瞬間、勢い余ってペニスが抜ける。
ティファは喘くより前に、その隙を逃さず身を翻した。

しかし、無駄なあがきだった。ティファはすぐに押さえ込まれてしまう。
結局、体位を入れ替えただけ。男は鼻歌さえ歌いながら、背後からティファを貫いた。
「いやっ、いやぁ！　抜いてっ、もうこれ以上犯さないでっ！」
「分かってないな。ティファちゃんは俺に買われたんだよ……犯し放題なんだよ！」
胸を鷲掴みにして、腰を打ち付ける。乱暴な行為は、やはり性的な刺激となる。
乳房を揉みしだくテンポに合わせて、膣口がビクビクと蠢いた。
あまりの締まりの良さに、普通ならすぐに射精してしまうところだろう。
しかし、つい今し方1発目を出したばかりの男は、苦もなく腰を振り続ける。
逆に辛いのはティファの方だった。締まる膣口を無理矢理こじ開けられる挿入。
それは自分が処女だった頃を思い出すような感覚だった。
（無理矢理押し込まれて、奪われる感じ……こんなの、酷すぎる！）
しかし、処女の頃とそうでない今には、決定的な違いがあった。
痛みばかりを覚えた破瓜と違い、今は身体が膣の快感を知ってしまっている。
多少無理矢理に突き込まれたところで、その快感は消し去れはしない。
（酷いって分かってるのに、イヤなのに……わたし、こんなに感じちゃってる！）
突き込まれる時の圧迫感。抜かれる時の喪失感。
カリが膣壁を擦る快感も、亀頭が子宮口を叩き付ける快感も、すべて知っている。
「どうした？　もう逃げないのか？」
男は愉快そうに、亀頭を膣口あたりでうろつかせながら責め立てた。
逃げたければいつでも腰を引いて逃げればいい、そう言ってるつもりなのだ。
（でも、それじゃあもう、気持ちよくなれない……っ……そ、そうじゃなくて！）
逃げなければ。そして、子供たちを助けなければ。
しかしもう、その思いはティファの中から消え去っていた。
口からはかろうじて男への罵声が出るが、膣がペニスを欲しがっている。
（違う……気持ちよくなんてない。イかせてもらいたくなんてない……ないのに）
ティファは大きく息を呑んで、男に対して声を荒げた。
「放して……っ！　これ以上は……！ああ！」
「よし！　それなら2発目をやるぞ！　しっかり受け止めろよ！」
否定する声をあげたつもりだった。しかし、身体は拒否していない。
ティファはもう、自分の身体が快楽の虜になっているのだと、認めざるをえなかった。

ビクッ
ああああっ！

戦いに敗れたティファには、どんな否定権さえも与えられなかった。シャツを咥えて乳房をさらけ出せと言われれば、それに従うしかない。敗者であるティファを買った男は、しばらくその乳房を視姦で堪能する。しかし、すぐに飽き足らなくなったらしい。1本の筆を取りだした。

（筆？　いったいなにをする気なの？）

想像すらできなかったティファ。その乳首に、男は筆先を這わせ始めた。

「んあっ！　な、なにをっ！？」

あまりのこそばゆさに声を出してしまうティファ。シャツが落ち、乳首を隠す。男はすぐにシャツをまくり上げ、また口に咥えさせた。今度は、より強く噛ませる。

「美しい身体だ……まるで白いキャンバスのようだよ」

男は恍惚の笑みを浮かべながら、筆を動かし続ける。乳首の周りばかり執拗にくすぐるのは、もちろん感じさせるためだろう。

これはティファという名のキャンバスを、欲情で塗りたくるための儀式なのだ。

（くすぐったい……）

でも、それがゾクゾクと背筋を駆けめぐる……んんっ）

くすぐったさを我慢する。

それは、性的な快楽を我慢することに似ていた。

そそり立った乳首が、快感を得ているという証だろう。

ティファは、自分の陰部が熱く潤うのを悟っていた。

乳首を弄られただけでこれだ。

果てしない肉欲がティファを責め立てる。

（もっと感じたい……もっと気持ちよくなりたい……イきたい……っ！）

心はとうの昔に折れ、堕ちた性の虜になっているのだった。

ひとしきり筆での愛撫を終えた男は、
自らの肉棒をティファの前にさらけ出す。
その熱さと匂いに一瞬たじろぐティファ。
しかし、唾えないわけにはいかない。
「さあ、気持ちよくしてくださいね？」
男の合図で、まずは亀頭をゆっくりと包み込む。
純い喘ぎが聞こえてきた。
ティファは唾液を出しながら、
徐々に深くペニスを呑み込んでいく。
口内に、むわっとした男のにおいが充満する。
先走りの匂いだろうか。
（すごい……頭がクラクラする。
もう、この匂いだけでも感じちゃいそう）
鼻で息をする旅、濃厚な男の香りが脳天を刺す。
舌を蠢かせ、亀頭を舐め回すと、
更に先走りがあふれ出てきた。
「んっ……ちゅっ、ちゅぷ、ちゅぱっ。
んんん、じゅるるっ、ちゅぷ……れろん」
舌先で亀頭をこねると、また男の喘ぎが漏れた。
感じているのだ。
そう思うと、ティファの舌使いも早まっていく。
（ビクンビクンし始めてる……
さっきよりも熱く、太くなってるみたい）
一度、根本まで呑み込む。
喉にまで届きそうな亀頭に、少しばかりむせ返る。
そして唇をすぼめ、舌を台にして、
口内からゆっくりと引き抜いた。
「おおおっ！　いい、これはっ！」
同じようにして、今度はペニスを呑み込んでいく。
息をすすりながらになるので、
じゅるじゅると唾液をすする音も響く。
何度か出し入れをすると
男のボルテージも上がってくる。
そういう時に亀頭を舐めると、
男はたいていうめき声をあげるのだった。

やはりこの男も同じだった。
ペニスを口から引き抜き、今度はパイズリを要求する。
激しい刺激のあるフェラと比べ、パイズリは緩やかな官能をわき上がらせる。
「これで、いいですか？」
自分の唾液をローション代わりにしてペニスを挟むティファ。
男は満足げにうなずき、官能を求める。もちろん、ティファは逆らわなかった。
むしろ、物欲しげな顔を見せつけながら、ペニスを擦り始める。
乳房に挟まった男根の熱さが、じんわりとティファの性欲をも高めていく。
「ほらほら。もっと強くしてくれないと、萎えてしまうよ」
身体を上下させたり、乳房を左右交互に上下させたりしながら擦る。
乳房の中はもう、ティファの唾液と男の先走りでヌルヌルの状態。
気を抜けばツルンと抜け出てしまいかねないペニスを、強く挟んで逃がさない。
（もう……胸じゃなくて、アソコに入れて欲しいのに……）
フェラもパイズリも、女にとっては焦らされているのと変わらない。
ティファはもう快楽欲求を抑えきれず、自分で乳首をこねていた。
パイズリでペニスを挟みながら、自ら乳首をこね、つねり上げる。
息があがり始め、また陰部からの愛液があふれ出るのを感じた。
男は、それを知ってか知らずか、ニヤニヤとティファの痴態を眺めるのみ。
「あの……ま、まだ、ですか？　もう……その…アソコに」
男はニヤニヤ顔を崩さず、ティファのあごをすくい上げた。
「くくくっ……いい顔だ。もっともっと、おねだりしてもらいたいね」

男は体勢を変え、背後からティファの乳房に掴みかかった。
「自分で乳首まで弄るなんて、なんていやらしい娘だろう」
「そ、それは……だって！」
もっと感じたい。絶頂したい。しかし、それを言うのははばかられた。
すでに心は折れてしまったといっても、羞恥心が消えたわけではない。
本当ならば、こんなことはしたくない。どうせなら、もっと行き着いてしまいたい。
中途半端な快楽しか与えられない今は、生殺し状態と言って良かった。
（アソコがうずく……わたしの女の部分が、突っ込んでもらいたがってる！）
男はわざと焦らしているのだろう。ティファにもそれは分かった。
乳房への愛撫は巧みで、ティファから喘ぎを紡ぎ出させる。
乳首を、乳房をこね回される度、何度も何度も吐息を漏らしてしまう。
「切なげないい顔だ……なにか言いたいことがあるなら、言ってみなさい」
なにを言わせたいかは分かっていた。早く欲しい。そう思っているのに。
それでも、ここで望んでしまっては、もう這い上がれないところまで堕ちてしまう。
そんな不安がティファを苛む。それでももう、言わずにはいられなかった。
「お、お願い……オッパイばっかりじゃなくて、アソコも……」
「アソコ？　アソコを、どうして欲しいのかはっきり言ったらどうだい？」
ティファの羞恥心、男の嗜虐心が最高潮に達する。
そしてティファは、乳首をつままれた拍子に高らかと懇願していた。
「アソコに……アソコに、おチ○チ○を入れてくださいっ！　突っ込んでください！」

…!!
ハッ…

しかし男は冷静だった。ティファを後ろ手に縛り、目隠しまでしてくる。
「おお、よく濡れているね……これはいじくり甲斐がありそうだ」
声と共に、太くてやたらと固いものが膣へと入り込んでくる。
膣口が広がる感覚にうっとりするが、その固さが普通のものではないと気付く。
「え……そ、それ、指？　違うのっ、その……指じゃなくって」
「ああ、そうだね。アソコには、ちゃんとペニスをあげようねっ！」
「っっ！？　なにっ？　そこっ、そこは違っ……んぁあああああああ！！」
男はティファの悲鳴に、深い充足感を得ていた。そして、激しい快楽も。
そそり立ったペニスを突っ込んだ先は、ヴァギナではなくアヌスだった。
男はそれを悟られないよう、この悲鳴を聞くために、目隠しと拘束をしたのだろう。
（ああ、入るっ。入っちゃいけないところに、熱いのが入っていくッ！）
まったくほぐしていなかったはずのアヌス。しかし、男のモノを受け入れていく。
「おおお、さすがに、こちらの締まりも最高だ」
亀頭が埋まった。そして男は、軽く腰をはね上げる。
ズンッという衝撃と共に、ペニスのすべてが直腸に沈んだ。
その苦しさと気持ち良さに、ティファはあられもなく喘ぐのみ。
その上、膣には指が潜り込んでいるのだ。男は膣内の愛撫も忘れてはいなかった。
（おかしくなる！　こんなの、気持ちよすぎておかしくなるっ！）
声にならない悲鳴。しかしこの快楽は、ティファの待ち望んだもの。
もはや半端な羞恥心も、理性もいらない。ただ、快楽だけあればいい。
「あぁあああ！あぁ！あぁあぁ！」
（深くまで来るっ！　お尻の穴の、奥まできちゃうぅ！）
同時に膣壁を指で擦る、Gスポットを探るのは簡単だった。
すぐに見つけ出して、重点的にそこばかり責めると、一層高い悲鳴があがる。
悲鳴と同時に膣から噴き出したのは、大量の愛液による潮だった。
潮吹きと同時に、ビクビクと身体が跳ね上がる。もちろん肛門の締まりも上がる。
男も、うっと苦悶し、腰の動きを早めた。
「あぁっ！　イくっ、い、イってください！　お尻の中に出してください！」
ヴァギナもアヌスもグチャグチャにして、ティファが最後の理性をかなぐり捨てる。
男は満足げに頷いて、腰を高く突き上げた。
「んあっっ！！　出てる……お尻の中に、ザーメン出てるぅ……んぁあああああ！」
直腸内で跳ね回るペニスの熱さ。膣をこねる指の快楽。
はらりと落ちた目隠しの下で、ティファは恍惚の笑みを浮かべていた。

んんんっ！
ビリッ
ビリッ
ビリッ

ムッ…
!!

いったいもうどれほどの間、体をまさぐられているだろう。
吊し上げられたティファは抵抗もできず、ただされるがままになっている。
(もう、どこを触られても感じちゃう……まるで全身が性感帯になったみたい)
口を押さえ込まれ、噛ぐことさえ許されない。その辛さもマゾ的な悦びになる。
「きれいな体ね。汗も、愛液も、まるで蜜のように甘くてたまらないわ、ふふふ」
まるでティファという蜜に群がる虫のように、男も女も夢中になっている。
乳房を揉みながらワキを舐めまくる女。その舌はまるでナメクジのよう。
すでにくすぐったさは通り越して、ねっとりとした快感を生み出している。
「見て。愛液がしたたり落ちてる。いったいどれくらいあふれるのかしら?」
淫唇をまさぐる指。クリトリスを転がす指。そして、膣をほじる指たち。
ヴァギナをもてあそぶ指たちの、なんと多いことか。
(マ○コの中に、指が、2本、あぁ、3本……お、お尻まで? あぁ、そんな)
女の細い指が2本、膣内を埋める。そこに、荒々しい男の指も潜り込んできた。
2人の指が、膣道をまんべんなくまさぐる。壁を擦り、Gスポットをこねる。
あまりの激しさに、ティファは口内で強い嬌声をあげたが、それは響かない。
息苦しさに涙がにじむ。いや。それは、快楽による感動の涙かもしれなかった。
(駄目ぇ……こんな激しいコトされたら、私、もう戻れなくなっちゃう!)
膣内で暴れる指と、直腸内をまさぐる指が、薄皮一枚隔てて触れ合った。
体中どころか、体内中まで愛撫され、ティファは何度目とも知れない絶頂に向かう。
(もう、この快感から逃げられない。普通のセックスになんか、もう戻れないっ!)
全身の性感帯から刺激が駆け上る。そしてそれは脳天を直撃し、爆発する。
「あら、またイったみたい。いつまで正気が保てるか、見物だわね」
ティファはもう、この快楽のためなら正気を失ってもいいと思っていた……

行方知れずになったティーダの足取りを追ううち、
ユウナは武道大会の話を聞く。
その大会に参加しているワケではなさそうだったが、
どうやら情報はあるらしい。
ティーダのためならどんな些細な情報でも欲しいユウナは、
大会会場を訪れた。
（なに……この熱気？　異様な雰囲気ね……
でも、もし戦いに勝てば！）
大会に参加し、勝利すればどんな情報でも得られるという。
いかにも闇の大会だ。普通には手に入らない
情報さえも聞けるだろう。
戦いの自信はないが、ユウナは大会に参加することを決めた。
（でも、この勝利条件って……イったら負け、
ってどういうこと？）
対戦は男2人対ユウナ1人。相手をノックアウトすればユウナの勝ち。
ユウナが相手にイかされれば負け。
負ければそれなりのペナルティがある。
（不気味な感じだけど、仕方ないわ。今のところ、
他にあてもないもの）
試合前。会場は激しい熱気に包まれていた。
飛び交う怒号は男のものばかり。
興奮剤と称して飲まされた薬が効いてきたのか、身体が火照り始める。
男たちの興奮がユウナにまでうつってしまったのだろうか。
冷静にならなければ、勝てる試合も落としてしまう。
ユウナは精神統一をする。
しかし、ジクジクとうずく下腹部の熱で、
どうにも集中力を欠いてしまう。
（これ、興奮剤なんかじゃない？　もしかして…）
そして、闘技場の扉が開いた。
「さぁて、そろそろ戦いを始めようか……楽しませてやるぜ！」
現れた男たちの目線に酷く淫らなものを感じて、
ユウナは早くもたじろいでしまった。

ユウナが登場すると、会場のボルテージは一気に上がった。
そして観客の誰かがもらした一言で更に盛り上がる。あれは、もしかしてユウナ様？
（こんな所でも知られてしまっているのね……でも、そんなこと関係ないわ！）
激しい歓声の中、戦いは始まった。男の初手を、軽やかにかわす。
二手、三手も軽いステップでかわしていくが、どうにも足がふらついてしまう。
やはり、先ほどの薬のせいだろう。足腰に力が入らない。
（どうして、たったこれだけ動いただけで息があがっちゃうの！？）
苦悶するユウナを見て、男たちはにやりと頬を歪めた。

はぁはぁと荒い息を吐くユウナ。男たちは徐々にその包囲網を狭めていく。
まるで大人と子供の戦いだった。余裕ある男たちに、ユウナは追い詰められる。
（やっぱりおかしい！　ちょっと動くだけで、パンツがこすれて……んっ）
パンツの中で、女性器がうずいていた。異様な熱さは、愛液のせいだろうか。
シャツの裏地が乳首を擦っている感覚もある。むず痒いのは、勃起しているせいか。
（さっきの薬……もしかして、媚薬だったんじゃ？　私、感じ始めちゃってるの！？）
意識し始めると、もうどうしようもなかった。あまりのこそばゆさに喘ぎさえ漏れる。
そんなユウナを、男たちが見逃してくれるはずがなかった。

フラフラになったユウナの背後から、
1人の男が捕らえにかかった。
一度はかわしたものの、またすぐに
詰め寄られ、結局簡単に捕まってしまう。
(いけない！　早く逃げ出さないと、
なにをされるか分かったものじゃないわ！)
くっと気合いを入れ直しても、
男の力にはあらがえない。
そしてもう1人の男が、にじり寄ってきた。
「いい格好だな、ユウナ様。
さて、これからどうして欲しい？」
男の声に、観客たちは興奮を
隠しきれないようだった。
裸にしろ！　屈服させろ！　犯せ！
あらゆるヤジが飛び交う。
(そうか。私は、イかされたら負け……
この人たちは、私を犯すためにいるんだ！)
今になってこの戦いが
仕組まれたものだと気付くユウナ。
ユウナの事情を知った上で、
騙して見せ物にしようというのだ。
あまりの悔しさに歯噛みするが、
それは男たちの攻撃性を刺激するだけだった。

シャツを乱暴に引きはがされ、
たわわな乳房が観客たちの目に触れる。
歓声をBGMにして、
男は早速乳首にしゃぶりついた。
「あぁあっ！　やっ、やめてっ……
駄目です、やめてください！」
媚薬のせいで勃起していた乳首は、
まんまと男の餌食になった。
吸い付かれ、舌で転がされると
じわじわとした快楽がわき上がってくる。
甘噛みされると、その尖った刺激に
ビクンと身を震わせる。
（なにこれ！？　胸だけでこんなに
感じるなんて、ありえないのに！）
男は両の乳首を交互に口で責め立てた。
空いたもう片方は、手での愛撫を忘れない。
乳房は揉み込まれ、押し潰され、
そして掴まれて引っ張られた。
こねくり回されるとゾワゾワとした
快感の波が全身をめぐる。
（駄目……感じちゃ駄目なのに！
私、たったこれだけで、おかしくなり始めてる！）
気がつけば、ホットパンツの中は愛液で
ぐしょぐしょに濡れていた。

カクン、と膝の力が抜けた。
捕まえていた男はユウナの動きに合わせ地面に転がる。
まるで抱き合ったままベッドに転がるような
体勢になって、ユウナはハッとする。
「はっ、放してっ！　放しなさい、このおっ！」
ジタバタと暴れてみても、
男の手が離れることはなかった。
むしろ強く抱きつき、ユウナの乳房を
自分の胸に押しつける。
どうやらその体勢が気に入っているのか、
男は低い笑い声を響かせた。
（どうしよう。離れない！　このままじゃ、
後ろからおかしなことをされちゃう！？）
まるで拘束具のような男と、
そこには自由な身の男がもう1人。
「さすが……お尻もぷりぷりしてて可愛らしいもんだな」
男の手が、ユウナの尻に伸びた。
ぺとっとした感触が、怖気を走らせる。
「やっ、やめて！　触らないで！」
もがくユウナ。しかしそれは、
お尻をふりふりと揺らす、まるで誘惑のポーズ。
ごくりと息を呑む男に、ユウナは身の危険を
感じて息を呑んだ。

しかし男は、まるで乳房でも揉むかのように
尻の双丘を揉み始めた。
さわさわと撫で回したかと思えば、
がっしりと掴みかかる。
ホットパンツから少しはみ出た尻肉を
つまれるのが、ひどく屈辱的に感じられた。
(なに？　どういうこと？
てっきりアソコを弄られると思ったのに)
男の指はギリギリのところで女性器に触れないまま。
あえてそうしているのだろう。
しかしそれ以外は十分に官能的な愛撫だった。
尻の割れ目や内ももをさすってくる。
谷間に沿って指を這わされ、
肛門をグイグイと押し込まれた。
不快感はあったが、それと同じくらいの快楽が
わき上がってくることに驚く。
(この人まさか、私のこと焦らしてるの？
それで折れると思われてる！？)
カッとしたのは、怒りか羞恥か。
これ以上ない屈辱に、ユウナは苦悶の喘ぎを吐いた。

しかし、尻や股間を撫でられ続けていれば、
女性器がこそばゆくなってくるのも事実。
相手のやり口は分かっているのに、
それに乗せられてしまう身体がもどかしい。
ユウナの喘ぎに官能の色を見て取ったのか、
男はついに女性器に触れた。
（来たっ！　か、感じてなんかやらないんだからっ！）
パンツを脱がすことなく、
上からくすぐるように土手をもてあそぶ。
ふにふにと指先でつつき、そして軽く引っ掻く。
その指先がクリトリスの位置に来た。
「ッッ！！　そっ、そこはっ……くぅ！！」
言ってから、しまったと口をふさぐ。
これではまるで、弱点を教えたようなものだ。
案の定、男はクリトリスの位置ばかりを
指先でくすぐり倒してくる。
はっきりとした刺激ではない分、
ゾワゾワとした鈍い官能が全身に広がっていった。
（駄目……もうずっと我慢ばっかりしてたから、
このままじゃいつか爆発しちゃう！）
我慢にも限度がある。
特にユウナは性的快楽に対する耐性が弱い。
ブルブルと震えるユウナを見て、
男たちはついに重い腰をあげた。

体勢を入れ替えられても、
ユウナは逃げ出す隙を見つけられなかった。
そして男は、ついにホットパンツの中に
手を入れ、直接ヴァギナを愛撫し始める。
（負けない！　この程度のことで、
負けるもんですか！）
男は土手を全部包み込むようにしてくる。
大きな手のひらが、ユウナを丸々包み込む。
すでにあふれ出ていた愛液は
想像を遥かに超える量だったらしい。
男が少し揉むだけで、ヌッチョヌッチョと
いやらしい水音を響かせた。
（そっ、こんなに濡れてるはずない！
こんな男たちに、感じさせられるはずない！）
ヴァギナを揉まれるのと同じように、
乳房も激しく揉み込まれていた。
けして小さくはない乳房だが、
男の手にすっぽりと収まっている。
そのすべてを包み込んで揉まれる感覚は、
ユウナの心の弱い部分をも覆うよう。
（ティーダ！　助けてティーダ！
私、このままじゃこの人たちに……っ！）
探し求めている相手に助けを乞うても、
届くはずもない。
ユウナは昂ぶっていく快楽に、
徐々に身を任せ始めていた。

たっぷりと揉みほぐされたヴァギナは、
まるで割れた水風船のように濡れている。
男たちは包み込む揉み込みから、
先端への刺激に指先を切り替えていた。
「あぁっ！　先っちょは駄目っ、
胸も、あ、アソコもぉっ！」
乳首をつねられると、直接頭に電気が走る。
目がチカチカし始めていた。
クリトリスからの刺激はもっとすごい。
頭だけではなく、全身に電気が走るのだ。
ツンとそそり立ったクリトリスは、
愛液にまみれた男の指でくすぐられる。
ヌルンヌルンとした愛撫に、
ユウナはもはや喘ぎを抑えることができない。
（もう駄目っ、こんなのイく！
イっちゃうよっ！）
乳首もクリトリスも、何度も何度も擦られ、
そしてつままれる。
気を抜いた瞬間、
すぐにでも絶頂してしまうだろう。
しかし、辛うじて残っている抵抗心が、
ユウナを絶頂へと向かわせなかった。
それがまた焦らされているのと
同じ状態になり、快楽を溜め込んでいく。
どのみち、もう限界は目の前にあった。

男たちは、女のイかせ方を十分に心得ているらしかった。
ユウナが絶頂に身を固くした瞬間、男たちはさっとその手を引く。
「え……？　なに？　なんでやめるの？　そんな……ひ、酷いっ！」
にやついた顔を見せつけながら、歩引いた場所に立つ男たち。
その視線が、開かれたままの股間にあることを見て取ったユウナ。
「こ、ここ……もっとここを弄って。イかせて欲しいのに……んん、くう」
男の視線に誘われるかのように、ユウナは自らの陰部をまさぐり始めた。
自慰だ。あまりの出来事に、会場から怒号のような歓声があがる。
「こんな中途半端な状態にされたら、あ、頭がおかしくなりそう……んんっ！」
自ら胸を揉み、クリトリスを擦る。
その指使いのすごさに、会場全体が息を呑んだ。
もはやユウナは、自分がなにをしているのか理解していないように見える。
大勢の観客に見られていることを忘れているわけではないのだが、指は止まらない。
「お願いします……イヤだけど、本当は駄目なんだけど……い、イきたいのっ！」

「やれやれ、ユウナ様はそんなにチ○ポが欲しいんですか？」
そうではない。イきたいだけなのだ。
こんな男たちのものを受け入れたくはない。
しかしこのままでは生殺しのまま。
自慰では満足な絶頂は得られないだろう。
「お……お願い、します。
もう、入れてくださいっ！」
その声を合図に、
男はユウナを犯しにかかった。
破裂寸前まで膨れあがった男根を、
一切の容赦なく膣へとぶち込む。
ユウナはその挿入感だけで、
かなり強い満足感を得た。強い嬌声があがる。
しかし、それだけではイけない。
我慢させられてきた分、
もっと強い刺激が欲しい。
（奥までっ、もっと奥まで……
あぁ、ごめんなさいティーダ！　私、もう！）
ユウナの欲求を満たしてやろうと、
男も早速腰をピストンのように突き込む。
その荒々しさだけでもう、
ユウナは容易に気を飛ばしていた。
目の前が真っ白になる。
細く長い嬌声は、絶頂の喘ぎだ。
ユウナは身体の力を抜き去る。
しかし、男たちの陵辱は、
まだまだ終わることがなかった。

「あぁ！　も、もうやめて……
今、イったから、もう私の負けだからっ！」
「馬鹿なことを言っちゃいけない。
本当の絶頂っていうのは、もっとすごいんだぜ？」
男はまだ射精していない。
まるで獣のように目を光らせ、ユウナを犯し続ける。
絶頂したばかりの膣はギュンギュンと締まり、
男にものすごい快楽を与えていた。
もちろんユウナも、ペニスの熱さや大きさを
必要以上に味わわされている。
苦痛にもにた快楽がユウナの全身を駆けめぐり、
強い喘ぎを吐かせている。
「こっ、こんなのすごすぎるっ、
私、お、おかしくなるっ！？」
押さえ込まれ、無理矢理突き立てられていることが、
強姦であることを表していた。
力尽くで奪われてしまうという屈辱、
そして絶望がユウナの心まで犯していく。
「よし！　まずは一発目だ。
子宮の真ん前で射精してやるからな！」
「ひっ！？　ひいっ！
いやぁっ、それだけはやめてっ、
中出しは……あぁあっ！」
ドクンドクンと注ぎ込まれる感覚があった。
同時に、ユウナはまた絶頂する。
これでユウナは、身体の中も外も、
そのすべてを汚されたことになった。

ぐったりとするユウナを、
もう1人の男が犯し始めた。
もはや逃げる気力さえ残っていないが、
喘ぎ声を出すことくらいはできる。
「おお、さすがユウナ様。
マ○コの具合もバッチリだな」
愛液と精液でぐちょぐちょになっている膣を、
男は容赦なく貫いた。
何度も何度も出し入れし、
膣壁のあちらこちらを擦り付ける。
押し込む度にブチュッと汚い音が響くのは、
膣内精液が押し出されているからだろう。
引き抜く時にも、カリに引っかけて
掻き出されるような気がした。
(でも……またすぐに、中に出されちゃう……
マ○コの中、いっぱいにされちゃう)
男のボルテージが上がってくる。
激しい動きは、射精のためのものだった。
「お、お願い……中に、中には、射精しないで……
……あ、あ、あ、ああああああ！」
最奥まで突き込まれ、
中でペニスが爆発したのが分かる。
絶望と快楽で、ユウナは激しく淫らな
喘ぎを響かせたが、それは歓声にかき消された。
そして遠のく意識の中、
もう一度だけ愛しい人の笑顔を思い出した……

気がつくと、そこは見知らぬ地下室らしき場所だった。
拘束具や拷問具の多さを見ても、まともな部屋でないことは分かる。
「やぁ、ユウナ様。目を覚ましましたか？」
先ほど戦った相手とは違う男。どうも目付きがおかしいのは、興奮しているからか。
「戦いに負けたあなたは、この私に一晩買われたんですよ……性の奴隷としてね」
ペナルティとはこれのことか。ユウナは今更青ざめる。
しかしふと見れば、脱がされていたはずの服が着せられていた。
拘束もされていない。逃げることもできそうだが、まだ足腰は弱ったまま。
まだ媚薬の効果が残っているのか、それともまた新たになにかを施されたのか。
ともあれ、今の状態では逃げおおせるコトはほぼ不可能に思われた。
男もそれを良く理解しているらしい。
焦ることなく、ユウナの前に立つ。
そしてまだ身体の自由が利かないユウナを立たせて、拘束具へと貼り付けにした。
（あぁ……もうこれで、一縷の望みさえ消えた……）
隙を見てなんとか逃げ出せないかと思っていたが、これではもう不可能。
絶望に打ちひしがれるユウナの背後から、
男は舌なめずりをしながら近づいてくる。

「あぁ、このヒップ……
会場で見てた時から、
触りたくて仕方なかったのです」
男は早くも息を荒げながら、
ユウナの尻を撫で始めた。
先ほどの男たちよりもネットリとした
その触り方に、
激しい不快感をもよおす。
そんなことはお構いなしに、
男は尻を撫で続けた。
掴みかかったり、くすぐったりしながら、
ユウナの反応を見る。
嗜げば男を喜ばせるだけ。
ユウナは歯を食いしばって
不快感に耐えた。
(戦いには負けてしまったけど、
こんな男の言いなりになんてならないわ!)
先ほどまでにくらべ、
また抵抗心がわき上がっていた。
今度こそ性の快感に屈したりしない。
ユウナは男に怒りの目を向ける。
しかし、男はユウナの思いなど
軽く受け流して
下品な笑いを浮かべるのだった。

「その強情が、いつまで続くか見物ですね……
ああ、この尻。最高ですよ」
撫でるだけでは飽き足らなくなったのか、
ついに舌まで這わせ始める。
またギリギリのところで女性器には
触れないあたりが、焦燥感をつのらせていく。
（感じたりしない！　こんなことで、
気持ちよがったりしないんだから！）
「ああ、この垂れ流れる愛液の甘さ。
プンプンと匂い立つメスの匂い……」
うっとりとした男の下品な言葉で、
ユウナは屈辱感に満たされる。
そしてその舌が女性器に触れた時、
敗北感にも満たされてしまった。
（駄目っ、感じちゃ駄目っ！
こんなやられ方をして、ヨガっちゃいけないの！）
尻肉を揉みしだきながら、
パンツの上から女性器をねぶる。
ヴァギナにパンツが食い込んでくる感じが卑猥で、
ユウナはつい喘いでしまった。
しかし、すぐに気付いて息を呑む。
屈してはならないという意識だけで立っている。
「こんなにグチョグチョにして……
早くぶち込んで欲しいんですね」
股間に顔を埋め、息をいっぱいに吸い込む男。
変態的な官能に、怖気が走る。
しかし同時に、心の中では男の声に
頷いている自分がいた。
また快感に溺れたいと、
身体は反応しているようだった。

男は顔を上げ、背後からユウナに抱き、
乳房と股間を同時に攻め始めた。
「やっ、やめてっ、やめてください……！」
尻はたっぷりと堪能した。
次は全身をくまなく愛撫しようというのだろう。
男のねっとりとした指使いは、
昂ぶり始めているユウナには辛い。
まるで指先すべてが粘膜であるかのような感覚は、
マゾヒスティックな快感を湧かす。
「乳首までキュンキュンにそそり立ってますよ？
感じているんでしょう？」
「ち、違います！　これはその……
あぁっ、いや！　つままないでぇ！」
乳首とクリトリスを同時につままれ、
身体が刺激に跳ね上がった。
つまんだまま絶妙な力加減でこねくり回されると、
全身が甘い痺れに侵される。
ましてこの男の指使いは巧妙すぎて、
もはや喘がざるをえない状態。
男の指が、更にパンツの奥まで入り込んできた。
にゅるり、と潜り込んだ先は、膣。
すでに濡れているそこに、指をめり込ませる。
男の指を難なく呑み込んでいくユウナ。
挿入感は、やはり快楽と共にあった。
「あぁ、だ、駄目ぇ……も、もう……んんっ！」
「なんで熱いヴァギナでしょう。
ここに私のモノをぶち込めるなんて……くくくっ」
男ももう我慢の限界なのか、
感極まったような声にユウナまでも期待してしまう。
（違う……犯されたくないの。
感じたくなんてないの……でも、でももう！）
熱すぎる喘ぎの中に、挿入をせがむ声が混じった。
男はもはや、焦らすことなくユウナにのしかかる。

「あぁ、や、やっぱり駄目……い、入れないで、あっ、くぁあああああ！」
駄目と言いつつも、ユウナの腰は男の攻めから逃げなかった。
男は凶暴な目をして、ユウナの秘裂にいきり立った剛直を突き立てる。
「おおお、すごい締まりです。さすがにいい尻をしているだけはありますね！」
尻を撫で回しながらの挿入は、こそばゆさと快感を同時に与えていた。
体内を圧迫する男のモノ。それから与えられる快楽がユウナを酔わせる。
（私、感じちゃってる。こんな男に犯されてるのに、またこんなに感じちゃってる！）
子宮がうずく感じがした。それは、快楽のすべてを受け入れてる証か。
口先ばかりの抵抗で、まったく嫌がっていないユウナを、男は満足げに見る。
そして容赦なく、熱い膣内を縦横無尽に蹂躙し始めた。
「あぁあ！　すごいっ、それすごいっ……はっ、激しいいいっ！」
出し入れする度、股間がパチンパチンと響きをあげる。
ただ打撃音だけではなく、そこにヌチョヌチョとした水音が重なっていた。
滝のように溢れ出した愛液の出す音だ。もはや、感じていないなどと言えはしない。
ユウナは突き込まれる度にせり上がってくる絶頂感を、素直に受け入れることにした。
「わっ、私、もうイくっ！　こんなに激しいの、すぐにイっちゃうぅう！」
男もユウナに合わせ、低いうなり声をあげる。それは射精の合図。
パチン！　と奥まで突き込まれた瞬間に膣内で爆発するペニスの熱さ。
ユウナはその激しさに自らの快感を重ね合わせ、はばかることない嬌声をあげる。
もう、愛しい男の顔を思い出すことさえできないままに……

「ああ、も、もうやめて……やめてください…
そんなところ、あ、んんっ！」
敗北したユウナを待っていたのは、
いかにも成金な男とその取り巻きだった。
負けたペナルティとしてユウナは
この成金に一晩買われ、慰み者になるという。
馬鹿げたペナルティだが、決定的な
敗北を喫してしまったユウナは逆らえない。
取り巻きの女たちをけしかけられ、
全身をくまなく愛撫され始める。
性に手慣れた女たちは、おそらく男の
性奴隷なのだろう。羞恥心はないようだった。
「可愛らしい声ね。でも、ココはもっと
弄って欲しいって言ってるみたいよ？」
早々に股間にも手を出され、
愛液に濡れそぼったヒダや突起を弄られる。
女特有のなめらかで張り付くような愛撫に、
ユウナはクラクラし始めていた。
（どうしてこんなことに……私はただ、
ティーダの情報が欲しかっただけなのに）
愛撫によって徐々に高まってくる欲情が、
愛しい男の笑顔を忘れさせる。
ユウナはすでに、性欲に溺れる
1人の女でしかなかった。

さすがに女たちは、ユウナの身体のどこが感じるのかをよく知っているようだった。荒々しさはまったくなく、ただしなやかに、無理なく官能を昂ぶらせていく。

「きれいな肌ね。それに乳首も薄いピンク色……きっとヴァギナもこの色なのね」

そして小さなスティック状のものを取り出し、なにかの液体を塗りたくった。

媚薬だろうか。そう思った矢先、それが膣と肛門へと押し込まれる。

「んいいいい！？　な、なにこれ！？　なに、あ、痺れる……んううう！！」

じわじわと痺れ出す性器に、身体がビクビクと反応する。

まるで戦い終えた時のような汗がしたたり落ち、女たちは満足げに微笑んだ。

「汗をかいているのね。まるで花のような香り……あぁ、愛液もとてもいい匂いよ」

したたり落ちる愛液をすくい上げては、指に絡ませたり舐め取ったりしている。

淫らであることだけを求められた女たちの愛撫に、ユウナは強く喘ぎ出す。

その声はもう、性に乱れた女の色香に塗りたくられていた。

「さあ、ご主人様にご奉仕する時間よ……
丁寧に、でも激しく、ね」
それまでは見ているばかりだった男。
その股間に屹立したものを咥えさせられる。
しかしユウナはもう抵抗しなかった。
むしろ、自分からすすり、しゃぶり出す。
舌をくねらせると、男は満足げにうめいた。
それを聞いて女たちも微笑む。
そしてユウナの頭を持ち、首を前後に
動かすように手助けを始めた。
(私は、口の中にだけ注意してればいいのね…
舌を、こう、絡めて……んん)
口をすぼめて、頬が当たるようにする。
舌を丸め、絡め取るようにする。
あとは唾液を絞り出せば、ロマ○コは完成する。
それも極上のモノが。
「あら、上手ねぇ？　フェラ好きの男にでも
仕込まれたのかしら？」
揶揄するような笑いに、
ユウナはなんの反応もしない。
ただひたすら、押し込まれるペニスを
しゃぶることにだけ専念する。
舌の上を行き来するペニスの熱さが、
そして太さが、ユウナの心を満たしていた。
男も満足げな声をあげ、
ペニスに血潮を巡らせる。
射精寸前のところでロマ○コへの挿入は
一時止められた。
まだ出したくないのだろう。
ユウナは少しがっかりしながら、
また普通にしゃぶる。

「ぷるんと張りのある、いいお尻だわ……
ココも、きゅっとすぼんで可愛らしいこと」
フェラ最中のユウナ。
その尻に、女の興味がいったらしい。
肛門に触れる指先。
少しずつ押し込まれてくる感覚に、
ユウナはハッと息を呑む。
「ふふふ……ご主人様のモノ、噛んじゃ駄目よ？
フェラを止めるのも駄目だからね？」
そう言うと、指を肛門に押し込んだ。
ヌルンッと入り込めば、押し込むのは容易い。
〈あぁ、お尻……お尻にまで指を突っ込まれて、
かっ、掻き回されてっ、あぁああ！〉
愛液で濡らした指は、
初めてのアヌスをも簡単に貫いた。
第2関節以上突き込み、中でカギを作ったり
こねくり回したり。
媚薬の効果も相まったその不可思議な感覚に、
ユウナはつい舌の動きを止めてしまう。
それでも男は怒ることなく、尻をもてあそばれる
ユウナを眺めてほくそ笑んでいた。
〈いけない……お尻がこんなに気持ちいいだなんて
知らなかった……んんっ〉
女たちに頭を押さえられ、フェラを思い出すユウナ。
アナル性感に目覚めながらするフェラは、
あまりに背徳的な官能。
ユウナはもう、居ても立っても
いられなくなってしまった。
「お願いします……もう、もう！
お尻じゃなくて、お、おま○こに……っ！」

懇願するユウナに、男は悲悲を与えるがごとく
ペニスを突き立てた。
激しくあがる嬌声に、男も女たちもゾクゾクと
甘い痺れをもよおす。
「ご主人様の宝刀のお味はどう？
お尻の穴にも開いてあげるわ」
挿入され、数度の突き上げの後、
またもや肛門をほじくられる。
膣にペニスが入ったままの状態で直腸まで
犯されると、激しい圧迫感が襲ってくる。
（これすごい！　こんな苦しいのに、
すごく気持ちいいっ……こんなの、私っ！）
腰をはね上げる男。そのリズミカルな動きに、
膣内を蹂躙される喜び。
女は手慣れているのだろう。
男の動きを邪魔しないよう、
アヌスを弄り回してくる。
「はぁ、はぁこ、これっ、すごすぎて、
私っ、もう……あぁあ、もう駄目っ！」
膣を、肛門を、そして乳房もまんべんなく犯され、
急激に高まる絶頂感。
ユウナはもう理性を飛ばし、自ら腰を振り乱して
絶頂を懇願する。
「ご主人様？　まずは一度、
たっぷりとしたご寵愛を授けてはいかがかと」
「お願いします……もう、もう！
中でいいから、中に出していいですからっ！」
そんなことは当たり前だといわんばかりに、
男は腰を高く突き上げる。
同時に膣内に熱いモノが満たされていくのを感じ、
ユウナも絶叫をあげた。
まだまだ、夜はこれからよ？
女たちの含み笑いが遠くから聞こえるようだった。

グッチョグッチョと響く水音に、細い喘ぎ声が重なっていた。
もう、どれくらいの間、この体勢でいるのか、ユウナ自身にも分からない。
分かることはただ、膣を犯すペニスの熱さと、尻をほじる男の指。その快感。
何度となく軽い絶頂を繰り返しているが、大きな波は来ていない。
来ないように我慢していた。激しくイってしまうと、そのまま気絶してしまいそうで。
(私、もうずっと、こうしていたい……マ○コとお尻で、ずっと気持ちよくなってたい)
男も激しいストロークはせず、じっくりといたぶるような動きを続けている。
ときおり、何度か激しく突き込むが、すぐ我に返ったように腰を鎮める。
そして亀頭を膣の浅い位置に置くのが、肛門をもてあそぶ合図になった。
「んぁあ……お、お尻の中で、おち○ち○と、指が、擦れて……んぅぅぅう!」
直腸に突き込んだ指で膣と直腸、その粘膜の薄皮を指で擦られまくる。
その異様な感覚にも慣れ、激しい官能を覚えるようになったユウナ。
アナル挿入をせがむかのように、フルフルと腰を震わせる。
男もまた、そんなユウナを喜ばせてやろうと深く直腸をえぐる。
あまりの快楽に互いが腰を振り始め、気付けばまた水音が激しくなっていく。
「あぁあ! 駄目っ、まだイきたくないっ、イきたくないのに……来ちゃぅぅぅう!!」
肛門と膣口がきゅうきゅうと激しく締まる。それに男は耐えられない。
獣のような声をあげ、膣内へと熱いエキスをほとばしらせる。
「はぁ、はぁ……もっと。もっとお尻……あぁ、今度は、お尻に直接入れてください」
その懇願に、男はもったいぶることなく応えるのだった。

戦いに敗れ犯されていくヒロイン。
淫らな責技で潮を吹かされ、男の腕の中でビクビクと跳ね回るティファ。街の建物の隙間、見つかるか見つからないかギリギリの状態での露出プレイを強要される王女アーシェ。
はりつけにされ、我慢の余地もないほどにしつこく尻を嬲りつくされるユウナ。

●１８歳未満の方は購入できません